

ボリシェヴィキのたたかい方

社会主義者の大臣は、その名まえによって、略奪と侵略をおおいにかくすにすぎないだろう。いや、すでにおおいにかくしているのである。彼らは政府の一員となり、資本家といっしょになって、戦争は防衛的なものであるだけでなく、攻勢でもあり、土地を農民に渡すのは、いますぐではなく、憲法制定議会が招集されてからだと言った。

だからこそ、われわれは臨時政府に反対なのであり、われわれの政府である労働者・兵士代表ソヴェトだけを政府と認めるのである。これ以上よい政府はない。これ以上よい政府を人民はまだつくりだしたことがないし、考え出すこともできない。

では、なぜこのわれわれの政府は、いますぐ人民に土地を渡すことを望まず、攻勢を力説する資本家、地主、社会主義者から成る臨時政府を支持することにきめたのか？ それは、いま労働者・兵士代表ソヴェトでは、各党が実際になにをめぐらしているかを理解していない農民の兵士が大多数を占めているからである。

ここから、労働者・農民にあらゆることを辛抱よく説明してやるというわれわれの任務がうまれる。つまり、戦争を終わらせることも、土地を農民のものにすることも、資本家とのほんとうの——口先ではなく、実際の——たたかいも、みなつぎのようなばあいにはじめて実現する、それは、労働者・農民の完全な権力だけが、労働者・農民・兵士代表ソヴェトの権力だけが、平和のためにも、土地のためにも、社会主義のためにも断固としたたたかいはじめることができるということを、全人民が、書物からではなく自分自身の実践から理解するようになったばあいである、と。

人民を飛びこえるわけにはいかない。少数者が多数者に自分の意志をおしつけることができると思ったのは、空想家、陰謀家だけである。フランスの革命家ブランキはそういうように考えたが、彼はまちがっていた。人民の大多数が、まだ理解していないために、権力をその手ににぎることを望んでいないときには、少数者がどんなに革命的で、賢明であっても、自分の意図を人民の多数者におしつけることはできない。

われわれの行動は、まさにここから生じているのである。

われわれボリシェヴィキは、われわれの見解を労働者と農民に辛抱よく、だが執拗に説明してやらなければならない。われわれ各人は、われわれの活動についてのこれまでの考え方を忘れなければならない。扇動者や宣伝者やものを知っている同志がやってきて、なにもかも説明してくれるのを待つというのではなく、各人がこの全部を兼ねる、つまり、扇動者にも、宣伝者にも、わが党の建設者にもならなければならない。

こうしてはじめてわれわれは、人民がわれわれの学説を理解し、自分の経験をよく考えることができ、実際に権力を自分の手ににぎるようにならなければならないのである。

第 41 卷『ペトログラード組織の集会における報告』P550～551 1917 年 5 月 8(21)日

1927 年に『レーニン研究所所報』第一巻にはじめて発表

『所報』のテキストによって印刷